



話題の本棚

ジョン・W・スコット著、荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』

G・E・M・アンスコム著、柏端達也訳『インテンション——行為と実践知の哲学』

特集／辞典

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／アフリカ学の眺望

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 **univ.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

女性／女性史の持つ問題意識と展望

ジェンダーと歴史学

ジョーン・W・スコット 著

荻野美穂訳

平凡社ライブラリー



本書、いや、今まで女性の地位に関する活動に積極的に奔走してきた人々の著作や学問的記述の根底には明確な問いがある——「女は、女たちを包摂してしまうか無視してきた分野のなかで、どうやって主体としての地位を獲得することができるだろうか。」

女性が男性と対等になるうとする試みは、常に男性のメインストリームに女性という差異を書き足すことしかできなかった。そうではなくて、もはやそのメインストリーム自体を書き換えねばならないのであると、著者を含めたフェミニストらは要請する。こうした明確な（著者は党派的ときえ呼ぶ）問題意識をもち、本書は、邦訳版刊行から三〇周年を記念して更なる訳を加えて論を展開する。

著者は、フランス史・ジェンダー史を専門とする歴史学者である。彼女は、女性が従属的地位に置かれてきたことを、時には歴史書の中で、時には現代社会で、また学術界でも目の当たりにしてきた。本書は、それら全ての女性抑圧的な構造を歴史的に記述し、また歴史学という学問におけるジェンダー権力闘争（政治）に踏み込む。

*

本書の構成の中心ともいえるべきは、第Ⅲ部。この部では、著者の専門である一七世紀フランスの労働史を題材として歴史の内部にい

かにジェンダーが入り込んでいくかを説く。搾取された労働者による運動の功労を説いてきた歴史的叙述の内部には、全くジェンダーの記述がないと著者は指摘する。労働者たちの抗議では家族について、また男／女の役割について語られているにもかかわらず、である。著者はそれが歴史学のみならず政治経済学などの統計の発展においても、男女の差、特に女の「依存性」を自然なものであると補強することにつながったことを、資料における人々の言説から明らかにする。女性労働者の抑圧は、歴史的なものであり、かつそれらを恒常的にしてきたのは歴史家たちでもあったのだ。

*

ジェンダー的観点とは、今の平等を希求する私たちのこれからのために必要不可欠であり、そうした観点を養うために、差異を手張してきた女性たちや女性史が存在してきた。しかし、これらを私たちは中心的地位に留まる男性たちやフェミニズムを通過しない「男性史」（あえてそう呼ぶ）の付属として学ぶのではない。客観的な情報を集めた歴史であっても、資料の用い方等によって埋もれた人々は多く存在してきたのであり、それらの記述が私たちのジェンダー概念を構築／再生産させてきた。本書から私たち読者は、歴史という固定的事実と考えられてきたものへの批判的視点や、差異を生み出した女性たちが目指す平等への道について考えさせられる。「歴史学がどのように過去を表現するかが現在のジェンダーを作りあげる手助けをしている」と著者はいう。これから先を生きる人々に宛てて、歴史は紡がれていく。

（トントウ）

（五二八頁 税込二四二〇円 5月刊）

『コレクションの『インテンション』——意図・原爆・制度

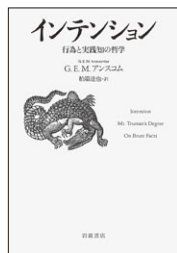
インテンション

——行為と実践知の哲学

G・E・M・アンスコム著

柏端達也訳

岩波書店



も知られる。そして、その彼女自身の代表的著作が本書であった。

『コレクションの『インテンション』

今回岩波書店から刊行されたのはその新訳であり、また、『インテンション』の前後に書かれた「トルーマン氏の学位」と「生の事実について」の翻訳も加えたオリジナル編集版である。

前者は、広島と長崎への原爆投下を命じた米国のトルーマン大統領（および彼に名誉学位を与えようとした大学）を厳しく非難する極めて実践的な文書である。こちらには不幸にも時宜を得ており、哲学に馴染みのない方でも読みやすいはずだ。例えば、その読みどころの一つは平和主義批判にある。アンスコム曰く、平和主義は「一度戦争が始まれば、もう最後まで行くしかない、すなわち虐殺も致し方ない」という逆の極端に転落してしまう——いわば「毒を食らわば皿まで」な——有害な教説である。

後者は、行為や出来事の意味づけのされ方を、その背後にある「制度」に着目してより包括的に論じる短く凝縮された論文である。アンスコムの文章はどれも難解で、その不親切さに寛容になる必要があるが、一〇頁弱のこのテキストから慣らしていくのも一つの手だ。訳者の柏端による親切な訳注も、たいへん頼りになる。

新訳『インテンション』がこの意味で、コレクションであること。これによって読者は、三篇に共通するモチーフと各篇独自の主張をそれぞれ捉え、アンスコムの思索をより奥行きのあるものとして理解できるだろう。あるいは「トルーマン氏の学位」の攻撃的な口調からはその人格までもが窺えるかもしれない。（投稿・伊藤迅亮）

あなたは今、この小冊子を取り、ページを捲り、書評を読んでいる。その理由とは何であったか？ どうしてそうしたのか？ 面白そうだったため。以前投稿した書評を確認するため。あるいはクイズに答えて図書カードをもらうため……。その答えはいくつかあるだろうが、いずれにせよ、意図的な行為には理由を問うことができる。一方で、大雨が鴨川を氾濫させたり、あなたがくしゃみをしたりにすることについて、理由は問えない。それらは、原因はあるが、理由はない出来事だ。

『「インテンション」——哲学的行為論の古典』

私たちの行為は自然の一部でありながら、単なる出来事・自然現象にはない独自性がある——こうした一見相反する関係をどう理解するか。ここに、哲学的行為論の一つの源があるが、G・E・M・アンスコムの『インテンション』は、この分野の古典として名高い一冊だ。実に、冒頭の「意図的行為については理由・意味を問える」というのは、この問題に対するアンスコム流の応答である。

アンスコムは一般に有名たとは言いがたい。少し説明を加えよう。二〇世紀後半のオックスフォードで活躍したこの女性哲学者は、L・ウィットゲンシュタインの高弟にして、その著作の英訳者として

百科全書—序論および代表項目 ディドロ、ダランベール他著 桑原武夫訳 岩波文庫

知らないことがある。
Google 検索をかける。ヒットしたのは Wikipedia のページだ。よし、これでわかったし、一つ知識が増えたぞ。今はこんな風に物事を調べるのが一般的だろう。昔ながら辞書や辞典をひいて調べていた。何らかの事柄について知識がまとめられ参照できる先があるというのはありがたい。このような形で知識がまとめられたものの元祖は何なのか？ということで、特集のトップに挙げる一冊は encyclopedia、すなわち『百科全書』である。

イギリスで先に『サイクロペディア』と名づけられた事典が発行されていたが、それを超えるようなあらゆる事項を網羅した書物を著そうという企てが 18 世紀フランスで啓蒙思想家たちによって起こされた。副題の示すところでは学問や芸術の解説、ということになっているが、それまでキリスト教の信仰に基づき神が作ったとされる世界の事項を、改めて人間の筆によって記述する試みともいえよう。もちろん全巻合わせると膨大な内容になるので、ここでは編纂の目的を述べた序論と主な項目を抽出した本書を紹介したい。

序論においては、いわゆる進歩史観に基づいた人間の技術・思想の進展が概観される。編者ディドロ、ダランベール、ジョークールらは系統樹という形で知識の体系化を図り、そこに様々な項目を配置していった。記述に関わっているのは彼らのみならず、たとえば本書に取り上げられた「自然法」の項目にはおそらくモンテスキューが、また啓蒙主義と後に袂を分かったルソーも途中までは関与していたであろう。

詳細に各項を読むのは骨が折れると思うが当時の知識の総体を体感してほしい。(ねこ)
(418 頁 税込 1177 円)



特集

辞典

ある観点から選ばれた単語を並べ、その意義や用法を説明するという辞典の形式は、国語辞典だけでなくさまざまな分野で用いられ、本として出版されている。

言葉の解釈は、それを共有する人びとの思想に大きく影響をうけるため、辞典を開くと、その編者たちの認識世界がたち現われ、一望することができる。

それは現実か、空想か、あるいは専門領域か。辞典に広がる未知の世界にとびこんでみてはいかが。

(たいやき)



日本の作家 名表現辞典

中村明著
岩波書店

日本語表現の巨匠ともいえる中村明が編む辞典。著者は、多様な日本文学作品から名表現を見出し解説する。全ての作品を網羅しているわけではなく、本書には著者の文学に対する嗜好も多分に反映されている。しかし、「理系でも文系でもない」著者が専門にした「文体論」を軸に解き明かす、鋭い文章考察は、そうした著者の選択の恣意性の有無を問わずして、客観的な辞典足らしめているようである。



例えば、夏目漱石のかの有名な著作が「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」から始まることはほとんど誰もが知っているだろう。しかし、なぜ、私たちはこの一文を知っているのか？ 著者曰く、「現実の猫は小説を書かないし、自己紹介もしない、だいいち、こんなふうには日本語を巧みにあやつらない」ことを見破った上で読者は猫の語りに驚く。また、猫を選んだあたりでも良かったらしい。犬だと「真っ直ぐの性格では、この作品の皮肉っぽく呟く語り手にはミスキャスト」だと述べる。なるほど、すまし顔でいつもさめた様子の猫なら役回りとして適切なのは合点がいく。更に、可憐で華奢なイメージもある猫が夏目漱石の一文によって「百獣の王顔負けの大きな態度で登場する」ために、物語にユニークさが加わり、読者は微笑する。この作品はつかみから大成功であった。

本書は名表現辞典と銘打っているが、同時に名作辞典ともいえる。ある文章の解説を読んでいると、知っている作品はまた読みたくなり、知らなかった作品は手に取りたくなる。眠る前に一表現ずつ読んでいけば、あなたの読みたい本リストが完成するだろう。枕元に一冊いかが。

(トントゥ)

(596 頁 税込 3520 円)

てにをは辞典

小内一著
三省堂

言葉はよく、『てにをは』によって結び付けられる。本書では、言葉が結びついた形を「結合語」と呼び、近現代の二百以上の作家の作品や、雑誌・新聞の文章から採集した六〇万の結合語例を掲載している。よって本書には言葉の意味の説明は一切なく、あるのは見出し語と、それに結び付く語の羅列のみだ。

ためしに引いてみよう。

しめる【湿る】◀感傷が。気分が。着物が。空気が。草の根が。声が。心が。土が。肌が。瞳が。皮膚が。表面が。布団が。舗道が。マッチャが。綿が。藁が。夜露で。胸に。重く。ぐっしょりと。しっとりと。じっとりと。じめじめ。やわらかく。てのひらが汗で。(略)

このようなリズムカルな結合語例が本書を埋め尽くす。ページを開くと言葉が一面に広がり、五十音順の配列が自然と韻を踏む。

本書の使い方は様々だ。言葉のつながり方を確かめるのは最も基本的な活用方法だろう。文章を書いていて、言葉のつながりや並びに違和感を覚えたら、結合語例を確認するとよい。また、言葉を探すのにも向いている。この言葉に対して適切な形容詞は何か、この気持ちはどう表現すればよいのか、もっと気の利いた表現はないか、本書を引けばびっぴりな言葉がきっと見つかる。

なにも文章を書く時でなくとも、本書は存分に楽しめる。パラパラめくっていると気になる言葉があちらこちらに落ちていて、それらが見出し語を介してつながりあい、洪水となって押し寄せてくる。連想が膨らみ、気づけば次々に語を引いている。そんな辞典だ。

本書を手にとって、溢れる言葉に埋もれてみるのもいい。

(たいやき)

(1824 頁 税込 4180 円)



世界シネマ大事典

フィリップ・ケンプ責任編集
遠藤裕子ほか訳 三省堂

映画について知りたい、しかし何から始めていいかわからない。そんな大学生も多いのではないかな。そんな方にお勧めしたいのが本書、『世界シネマ大事典』。オールカラーで1100以上の作品が紹介されるこの辞典は映画史を知る上でも入りやすい一冊だ。名シーンのカットや各映画の見どころを紹介するなど、ページをめくるだけで愉しめる。

1902年のフランスのサイレント映画『月世界旅行』から紹介される本書は、その多くが見たこともない作品ばかりだろう。トーキー映画の草創期、大恐慌時代に作られたミュージカル映画、ナチス映画やソビエト映画、出てくる作品のほとんどを知らずメモばかりが増えていく。サブスクでは見つけられない映画ばかりだ、図書館に行けば見つかるだろうか。紹介を読んでいるだけなのに、映画についての教養が広がっていく。名前だけ知っていた監督の業績を知り、戦争期にどのような映画が製作されたかを学んでいく。自分が知っていた映画の知識がどれほど狭く、どれほど偏っていたのかに気付いてしまう。

またオールカラーで紹介されるページの中で注目してしまうのが各映画のポスターだ。現代では映画のカットがそのままポスターになるが、かつてはそれ用に絵が描かれていた。煽情的なポスターやアヴァンギャルドなポスター。宣伝の仕方にも時代や地域の差異が現れ、作品以上に印象に残ってしまう。

映画は本と比べて、古典に接しにくい。戦前の映画を知る機会が少なく、そのことが見る機会を減らしてしまう。映象芸術が流行するこの時代、その教養を深めるためにも是非一冊手元においてみては。

(きもの)

(576頁 税込4620円)



美学辞典

佐々木健一著
東京大学出版会

つづいて、一風変わった「読む」辞典を紹介しよう。『美学への招待』などの著者としても知られる佐々木健一の『美学辞典』である。美学の教科書として構想された本書は、「美」や「芸術」といった基礎から、「表現」や「様式」など少々込み入ったものまで、この学問分野にまつわる計25の基本概念を取り上げる。

それぞれ約10ページの紙幅を割く各項目の解説は、次の三つの観点から記述される。すなわち、①必要な限りでの説明を加えながら著者自身が当該の概念の定義を試み、②それにまつわる概念史や学説史など、この定義が依拠する諸説や異説を引証する。そして最終的には、③その概念がいかなる意味で美学の問題となりうるか、著者自身の見解が積極的に書き添えられる。たとえば「美もしくは芸術、あるいは感性的認識を主題とする哲学的学科」と定義された「美学」の項を見てみよう。解説中盤、近代美学が成立までの道すがらがごく手短かにまとめられたのち、末尾には佐々木による見解、そもそも美学を語ることには可能なのか、というパラドキシカルな問題が提起される。著者による主観的な意見と客観的な情報とが峻別され、後者にはその典拠も添える親切的な記述は、美学に精通する者にとっても初学者にとってもありがたい。

ある意味でこの分野のスタンダードとなった本書も、刊行からすでに四半世紀以上が経過した。本文の内容がアートワールドの現在にどこまで妥当するかに留保が必要だが、いづれにせよこの「開いた作品」が原点となって読者に論点の整理を促すとき、本書は今なお現役で、ここに意味を尋ねることの意義はいまだ失われていない。

(投稿・カイリ)

(306頁 税込4180円)



新編 悪魔の辞典

ピアス著 西川正身編訳
岩波文庫

芥川龍之介の『侏儒の言葉』に大きな影響を与えたとされるこの奇妙な辞典の著者、アンブローズ・ピアスは、19世紀のアメリカに生まれた作家・ジャーナリストである。いくつかの語の定義を示せば、本書が普通の辞典ではないことが、おのずと察せられるように思う。

たとえば「錆びついた」(rusty)の定義は「正義の女神の剣」、「一年」(year)の定義は「三百六十五回の失望から成る一期間」、「自尊」(self-esteem)の定義は「誤った評価」、「自明の」(self-evident)の定義は「他のすべての者を除き、自分自身にとってのみ明白な」となっている。そう、本書は語の客観的な定義が書かれた辞典ではない。本書は、ピアスのブラックユーモアに満ち溢れた主観的な、しかし時に真理を鋭く抉り出すような定義が書かれた異色の辞典なのである。

ピアスの慧眼はとくに、政治に関する語において発揮される。日本政治の現状を念頭に置きながら読むと、思わずうんうんと頷いてしまう。たとえば「愛国者」(patriot)の定義は「部分の利害のほうが全体のそれよりも大事だと考えているらしい人」、「財政」(finance)の定義は「歳入および資源を、管理者自身の最大の利益になるように管理する技術ないし理論」、「政治」(politics)の定義は、「私の利益のために国事を運営すること」となっている。普通の辞典に載っている客観的な定義よりも、よっぽど実態に即した「客観的」な定義だと感じられる。

毒舌に次ぐ毒舌から成る本書だが、時にはおちゃめな定義もある。「たわごと」(nonsense)の定義はこうだ——「すばらしい出来栄の本辞典に対して唱える異議の数々」。(ばや)
(318頁 税込924円)

幻獣辞典

ホルヘ・ルイス・ボルヘス著
柳瀬尚紀訳 河出文庫

アルゼンチンに生まれた「書淫の怪物」ボルヘスは、その半生を暗闇の中で過ごした。本書は、彼が盲目となった後に書かれた作品である。目に見えぬモノたちの世界を案内するにあたり、彼ほどに心強い導師はいないのである。

本書は幻獣たちの詳細な知識を与えてくれるというよりも、文学中で描かれる彼らの一面を綴った覚え書きである。それゆえ、〈一角獣〉や〈ニンフ〉など聞き覚えのある幻獣に加え、〈神〉や〈分身〉など幻獣とは定義しがたい対象も見出しに並んでいる。

印象的な項目を見てみよう。〈ある雑種〉——「ぼくは奇妙な動物を飼っている。半分猫で半分羊だ。これは父の形見だ。しかしぼくが飼うようになってから、こうなったのだ。」唐突に始まるエッセイ風の文章。これはカフカの作品からの引用だが、ボルヘスはあえて何の説明も加えない。事前解説なく進められる語りに、読者はまさに、文学における異様なモノとの出遭いを体感するだろう。

ボルヘス独特の幻獣談義は、〈ひとつ目の生き物〉の項でも繰り広げられる。ホメロスから17世紀までの詩に現れるひとつ目巨人の描写を辿りながら、彼は詩自体の表現分析をも試みる。時代が下るにつれて、詩人と神話世界の結びつきは希薄化し、巨人の描写も弱々しくなると、彼は論じる。単なる“辞典”と一線を画すことはもう明白だろう。

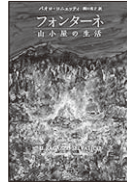
ゆえに、辞典と名乗る本書に実用性を求めてはならない。そこに膨大な文学史的知識が詰め込まれていようとも。序論の言葉通り、異界の住人との出遭いから得られるのは、初めて動物園に行く子供が感じるような驚嘆と怯えの入り混じった喜びなのだから。(はらん)
(336頁 税込1210円)



新刊
コーナ

フォンターネ
山小屋の生活

バオロ・コニエツティ著
関口英子訳 新潮社



人は何故山を目指すのだろうか。誰もいない自然の中で生活し、ただ孤独と向き合いたくなる。それはどこか文明の生活に欺瞞を感じているからかもしれない。人と情報に繋がり過ぎていることに虚構を見出して、そこからかもしれない。



「フォンタネ」の表紙には、山に囲まれた静かな風景が描かれています。タイトル「フォンタネ」は、山小屋の生活を描いた作品です。

ベストセラー『帰れない山』で世界的に有名になった作家、パオロ・コニエッティ。彼は三〇歳を迎える時に転機が訪れた。あらゆることに意味を見出せなくなり、何も書けなくなってしまったのだ。それは彼にとって眠れないことと同じようなものだった。自らの源泉が枯渇した彼は、自分を取り戻すためにアルプスの山麓で生活し始める。本書は二人の作家の山小屋生活を綴った記録である。

不便であることに尊さを見出す、簡素であることの至福を噛みしめる。副題にある通り彼はヘンリー・デイビット・ソローに憧れて

いた。時代や地域が変わっても、野生の暮らしは人間に必要なものを語りかけてくれる。生活の中で自らを模索し徐々に彼の中の川が流れ始める。幼少の頃に楽しみ、そして青年になる中で忘却された山の生活の記憶を取り戻していく。孤独への意志は徐々に溶けていき、山男や犬たちと交流を深めていく。

翻訳でも失われない、流れるような文章。炎の暖かみや風の冷たさを感じられる描写力。ああこんな暮らしをしたい、そこには私たちが忘れ、そして帰りたいくなるような生き様が写っている気がするから。(きもの)

(二七二頁 税込一九八〇円 2月刊)

幸村を討て

今村翔吾著
中央公論新社

真田幸村。この名を知らない日本人はほばいないだろう。



しかし、実は彼は死の前日まで諱「信繁」を名乗っており、「幸村」という名は、生前の確かな史料には見られない。謎は名のみならず、彼の戦果をはじめ、その生涯、いや真田家自体を覆っている。

「幸村」とは誰だったのか、そして「真田」の目的とはなんだったのか。

本書は物語の中で、これらの謎について、一つの解を提示している。真田の宿敵である徳川家康を探偵役とし、「幸村」そして「真田」の謎に迫っていく本書は、時代小説でありながら、ミステリー的な構成を取っており、「真田の物語」と、家康が「幸村」に迫る中で証言を得た「幸村と関わたった武将たちの物語」の両輪で話が進む。様々な視点から語られることで次第に「幸村」が像を結んでいく過程は爽快であり、その中で描かれる武将たちの優くも熱い関係性、そして真田家の複雑な、しかし強くお互いを想い合う固い絆に胸を掴まれる。

自分を勝る才能を持つ息子に苦々しい思いを抱きつつ心の底では強くその幸せを願う父そんな父を理解し、離れた場所に身を置きながらも父の夢を叶えようとする息子、お互いに尊敬の念と深い親愛で結びついた兄弟。決して直線だけではない、時に捻れた裏に隠れる、三人を結ぶ糸は、複雑な絵を描き、物語は深みを増す。作中何人もの武將が口にする「幸村を討て」。この言葉を捻り出すまでの真田の努力を、乱世を駆け抜けた彼らの夢の果てをぜひ見届けてほしい。(投稿：黄丹)

(五二七頁 税込二二〇〇円 3月刊)

棗椰子の木陰で **第三世界フェミニズムと** **文学の力**

岡真理著 青土社

「マディーナト・
ル・バラフ、棗椰子
の街」——イラク南
東の都市バスラは、



棗椰子で有名なのだと言う。何百万本もの棗椰子が生い茂るバスラの街で、人びとは棗椰子とともにその生を営んできた。棗椰子の木陰で静かに本を読む青年、あるいは棗椰子の木陰で愛を語り合う二人。そんな平和な光景が頭に浮かぶ。しかしその光景は、度重なる戦争によって無慈悲に破壊された。爆撃は棗椰子の木陰を跡形もなく消し去った。その木陰に蓄積された数々の思い出もろともに――。

本書には、副題が示すように「第三世界フェミニズムと文学の力」に関する諸論者が収録されている。表題作「棗椰子の木陰の文学」で論じられるのは、イラクやパレスチナの過酷な現実において、文学が持つ力である。人びとが虫けらのように殺されているとき、文学にいったい何ができるのか。著者はこの切実な問いに対して、こう答える——ジャーナリズムは「今、ここ」の出来事を伝えるこ

とができるが、文学は「そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにその生を営んできたか、何を愛し、何を怒しみ、何を大切に生きてきたか、そうした生の具体的な細部」を描くことができる。私たちはそれを知らないかぎり、戦争が人びとから何を奪ったのかを、真に知ることができない。爆撃が焼き尽くしたものの、それは棗椰子だけではない。爆撃は、棗椰子に纏わるたくさん大切な思い出をも無残に焼き尽くしたのである。文学は棗椰子の木陰に思いを馳せることを可能にする。ここに文学の力がある。（ばや）
（二九三頁 税込二四二〇円 5月刊）

母と娘の物語

戦後オーストリア女性文学の
《探求》

國重裕著 松籟社



母が娘を責め、娘は母を苦しめる。よくある家族像だろうか。もしそうなら、

保守的な男中心社会の毒を疑った方がいい。女性ばかりが苦々しき生を強いられる。それが戦後オーストリアにて書き継がれた「母と娘の物語」である。いや、書かず、継がれた

と言うべきだろう。著者は七人の女性作家による文学作品の「書かれなかったもの」に探求の目を向ける。家父長制やカトリシズムがもたらすグロテスクな秩序は、書く行為自体におぞましい不自由さをもたらす。それに抗う術こそ、書けない姿、苦しんで書く姿を示し、パフォーミングの「わたし」たちを表現するという覚悟の道だったのである。

バッハマンやイエリネクといった世界的書き手と共に紹介される名には、あまり有名でないものもある。だからといって作品の強度に差はない。最初に取り上げられるマルレーン・ハウスホーファーの「ステラを殺したのわたしたち」では、養父たちに凌辱された娘を見殺しにした主婦の回想が語られる。それは、感傷的な後悔ではない。「ステラが死んで、ほんとうに気が楽になった。（中略）あまりにホッとして吹き出してしまったくらいだ」と「わたし」は書いている。この述べにより、自身も主婦だったハウスホーファーは、抵抗を書き得ず男の共犯となってしまう女性の実情を暴いたと言えよう。その姿を書くことで、既存社会の歪さを示すために。

バトラーやクリステヴァの思想を駆使し過去の探求者の軌跡を迎える本書。その現代的意義にも心を寄せ読んでもらいたい。（とよ）

（一九二頁 税込二六四〇円 2月刊）

魔女狩りの社会史

ノーマン・コーン著 山本通訳
ちくま学芸文庫

「魔女狩り」と聞
き、皆さんは何を思
い浮かべるだろう。
本書の著者コーンは、



魔女狩り研究は我々を「迫害の社会学と社会心理学」に導くと述べる。つまり、一五一一八世紀に世を震わせたこの現象を知ること、迫害の歴史とそれを正当化した社会の非道德的かつ非理性的なメカニズムに光を当てることに他ならない。そうした排除の根源的性質を見極めるべく、著者はあえて、魔女狩りの最盛期たる一五世紀以降には触れない。

魔女狩りの起源は、二世紀ローマ帝国に遡られる。キリスト教という異質な共同体を排斥するため、ギリシア人は、異教の教義を独自に（都合の良いように）解釈した。聖餐式は性的オルギーと人喰いの場とみなされ、あらゆる災厄がキリスト教徒の行いに由来すると「妄想」された。つまり、当初、魔女狩りの動機は、悪魔との契約を罰することにはなかったのである。四〜五世紀にかけ、被迫害者であったキリスト教徒が迫害者となる過程

で、悪魔の存在が魔女狩りの必須要素となったことが明らかにされる。

本書後半で列挙されるように、異端狩りの手は教皇にも及んだ。高位の人間ほど、知識を総動員して理論武装した「妄想」によって虚構を現実として書き換え、社会に大きな動揺をもたらすのだ。第三章で述べられる通り、初期の魔女狩りは、往々にしてある個人の「個性」が引き金となって起きた。この点に上からの情報操作によって、容易に迫害が生じうる現代との共通性を見出すのは評者たちだろうか。

（六〇八頁 税込一八七〇円 3月刊）

歴史学の擁護

リチャード・J・エヴァンス著
今関恒夫、林以知郎、與田純訳
ちくま学芸文庫

「私は慎ましく過去を見つめ、ポストモダニストのどのような議論にもかかわらず、こう主張したい。それでも過去の出来事は現実を起こったのである。したがって、歴史家が十分慎重で、注意深くあり、自己批判に徹するならば、その出来事がどのように

して起こったのかを見つけたし、たとえ過去を解明しつくした最終結論に達することはできなくとも、その過去がいったいなにを意味していたのか、批判に耐えうる結論にいたることはできるのだ、と。」——この結語こそ、最良の総括であろう。では、それらはいかにして可能か。本書はそれを読む史学論である。

初訳邦題に添えられた「ポストモダニズムとの対話」が示す通り、本書がその当初意図したのは、歴史学の存立に疑義を呈した「ポストモダニズム」に対して、史料に立脚した整合的解釈としての「歴史」の意義を示すことだった。しかし、新版あとがきで述べ懷され、そして（随所に皮肉を交えて）反駁されるように、本書は保守なり右翼なりから攻撃される憂き目も見た。本書の反響が窺い知れよう。つまり、本書は現在もはびこる「歴史修正主義」——否認主義に至る議論に、歴史学の正統から心答した書でもあり、それは本書が今こそ再読されるべき所以でもある。

とはいえ、本書は本来の論敵を撃滅せんとしたわけではない。その目的、「一方でポストモダニストの極端な相対主義と、他方で伝統的な歴史主義者が掲げる実証主義という両極端の中道を目指す」ための議論は説得的か、さて、読んで確かめてみてほしい。（侯爵）

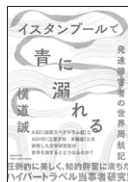
（五七六頁 税込一八七〇円 5月刊）

イスタンブールで青に溺れる

発達障害者の世界周航記

横道誠著 文藝春秋

四〇歳にして自閉
スペクトラム症（ASD）と注意欠如・多動症（ADHD）



の診断を受けた文学研究者が本書の著者だ。他者からの断絶感、現実体験と幻想が混濁、「脳内多動」による朦朧感、処理しきれない聴覚情報、これらによる総合的な感覚を著者は「水の中にあるかのよう」と表現する。

本書は、当事者の視点から障害研究も行う著者が、発達障害と診断される以前の旅行体験を当事者研究の知見から解釈し直した旅行回想記だ。ウィーン、ベルリン、イスタンブール、ニューヨーク、バンコク、上海。二五の都市を舞台に、未知の土地を旅し、他者と出会い、芸術と触れ合う中で、著者は体験世界に激しく揺さぶられる。発達障害でゆらめく身体は世界に翻弄され、キマイラ現象、フロイド体験、失感情症、マインドワンダリング、脱男性化といった体験をしてきた。

そんな旅の道中、著者の慣れ親しんだ世界文学の様々な場面が同時に立ち現れる。カフ

カ、ムージル、ヘミングウェイ、村上春樹。多岐にわたる文学作品の引用が混沌とした体験世界の記述と溶け合うことで、より味わい深い紀行文へと昇華されている。

発達障害の諸特性は、単純に厄介なもので、克服すべき、といった否定的な位置づけをされるものでは必ずしもない。むしろ、心の扉を開き、豊饒なイメージを湧き立たせ、未知の世界に解き放つてくれるのだと著者は語る。本書を通して、世界の多様性だけでなく、発達障害という「脳の多様性」を認識し、楽しむことができるだろう。（たいやき）

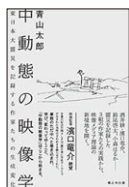
（二八六頁 税込一八七〇円 4月刊）

中動態の映像学

東日本大震災を記録する

作家たちの生成変化

青山太郎著 堀之内出版



本書では、『ドブイブ・マイ・カー』の監督・濱口竜介を含め、東日本大震災と向き合った三組の映像作家の実践が、「中動態」を手がかりに分析される。

二〇一一年当時、すでに映像の撮影と発信はマスメディアだけのものではなく、「当事

者」の撮影した膨大な映像記録が生まれた。しかし著者は「当事者」が撮影したという点だけで過大評価することを批判する。同じ体験をしていようとも人は、それぞれ「共有不可能な経験や感情を持つ特異な他者」である。

そのような事実が肯定されつつ、人々が共存できる場として、著者は「3がつ11にちをわすれないためにセンター（わすれん!）」を紹介し、そこに通っていた酒井耕と濱口竜介・鈴尾啓太・小森はるかのかの作品と実践を考察していく。例えば酒井と濱口は、東北記録映画三部作と呼ばれる作品群において、丹念に対話を記録する。二人は、映像に登場する語り手が「震災の当事者」として「真実を語る者」であるかのように見えてしまうことを問題であると考えていた。このような問題を乗り越えるために、語り手と聞き手はそれぞれ真正面にカメラを握えられ、正対しない形で対話する。あえて「作為の痕跡」が残され、観客は他者の「わからなさ」を担保しつつ語りを聞かざるを得ない。三組の作家の作品はこのような「主体と対象が同時に複数の関係性を取り結ぶ」ような「複眼的中動態」を持つと、著者は論じる。

「当事者」が撮った／撮られた映像のその先へ共に向かおうとする一冊。（投稿・石透）

（二七四頁 税込二四二〇円 1月刊）

亡命文学論

徹夜の塊Ⅰ 増補改訂版

沼野充義著

作品社

「詩となってロシアに帰る」と題され、たゞしりと厚い、一冊の亡命ロシア詩



アンソロジーがある。東西冷戦時代、鉄のカーテンがまだ厳然として存在していたとき、亡命作家たちは「もう二度と故国の土は踏めない」という悲壮な覚悟とともに「異郷に生きていた。もう二度とロシアには戻れない——そう固く信じていた彼らに残されていたもの、それは「詩となってロシアに帰る」という美しきも哀しい希望、ただこれのみだった。

本書は、「亡命」という切り口から文学を論じたいくつかの文章、すなわち「亡命文学論」を一冊にまとめた大著である。スラヴ文学を専門とする著者がとりわけ注目するのはソ連および東欧からの亡命者であり、そこではソルジェニーツィン、ナボコフ、クンデラといったよく知られた作家から、ゴンブローヴィッチ、ドヴラトフ、プロツキーといったあまり知られていない作家まで、数多の亡命作家が論じられる。「亡命者の存在様式」

それは人間一般の生き方の原型を鮮やかに示している」という信念のもと、亡命文学を通して人間の存在様式の原型をあぶり出すこと、それが本書の目的である。二〇世紀の傑出した作家には亡命を経験した者が多く、とりわけロシアではその傾向が強い。ロシアにおいて亡命者は、「周縁的な存在」ではなく「中心的な存在」だったのである。それゆえ本書は、優れた亡命文学論であると同時に、優れた二〇世紀ロシア文学論でもあると言える。ロシアのウクライナ侵攻により亡命者が増加している現在、本書は必読である。(ばや)

(五〇七頁 税込五二八〇円 4月刊)

綴葉編集委員募集および投稿募集のお知らせ

『綴葉』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二〜三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『綴葉』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京都市大学生協加入者で大学院の修

了課程ないし医学部の五回生以上、そして右記の仕事を継続して行うことが出来る方です。この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとことポストに投函するか、『綴葉』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡差し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代(上限二五〇〇円)および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。書評の形式は次の通りです。

①「新刊／新書コーナー」…新刊二〇字×三二行、新書二〇字×二三行。出版されてから半年以内の書籍を対象とします。

②「最近読んだ本」…三〇字×四二行。普段の読書の中で特に面白かったものを紹介、批評して下さい。刊行時期の制限はありません。二冊以上取り上げたい場合はご相談下さい。

いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・税込価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。メールにて受け付けています。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

(編集委員一同)

依存症と回復、そして資本主義
暴走する社会で希のステップを踏み続ける

中村英代著 光文社新書

一時の安楽と絶えざる飢餓感。依存の苦しみを味わう者は、今日決して少なくはない。依存症は個人規模の問題ではないのである。

まず、現代社会が何かに人を依存させるといふ前提が、著者の中村にはある。どんな個人も集団も、誰もが報酬獲得と苦痛回避により駆動する。そのプロセスは酒や薬物への依存行動に重なるものであり、資本の増殖を至上とする資本主義にまで通じているという。人類学者ベイトソンの理論を介しつつ論じられる「依存症」と「現代社会」との連関には肌感覚で理解できるものがある。

こうした前半部の問題提起に続き、後半では薬物依存者のための施設タルクなど、回復支援の現場からの証言が並ぶ。依存の解決策が重要なのではない。依存する当人と支援者が、いかに「身を委ねる」べきかが個別のケースごとに問われる。その点から、依存を強いる社会からの脱出手段が仄見えるだろう。

理論と実践の両面から導かれる論者の展望は、一つの可能性に留まる。だが議論の広い射程に鑑みれば、無視はできない。

(二六四頁 税込九六八円 5月刊)

タリバン台頭

——混迷のアフガニスタン現代史

青木健太著 岩波新書

昨年5月——アメリカ軍やNATO軍が撤退を開始した時期から、アフガニスタンは急速な変化を迫られた。現在タリバーンは既存の共和制を覆し、イスラムに忠実に則ったとされる女性抑圧的な政策を展開している。

これらの記述は私たちが得られる情報の一側面に過ぎないと著者は訴える。というのも、タリバーンの非情さを伝えるだけでは「なぜ」台頭したのかという問いに正確には答えられないからだ。アフガニスタンで勤務してきた著者は、タリバーン台頭の背景にあった、腐敗した政治体制、国際社会の圧力、それらがもたらす民主性の喪失について考察する。タリバーンは確かに酷い、そして酷く映るように国際メディアは報じてきた。しかし、遠い国のどこかで起こった悲惨な宗教上の問題など片づけてはないだろうか。著者は再三、タリバーンが実行支配する背景を見落としてはいけないと主張する。幾重もの構造化された原因が、そこにはある。

本書でアフガニスタンの情勢を学び、関心を抱くきっかけになれば嬉しい。(トントウ)

(二二二頁 税込九二四円 3月刊)

人種主義の歴史

平野千果子著

岩波新書

多様性が謳われるようになった昨今、一方でBLM運動など人種が衝突の根幹にある問題は絶えない。この「人種」とは何なのか？本書はその歴史を丁寧に掘り下げていく。

お気づきだろうかが本書のタイトルは「人種」ではなく「人種主義」。ここで著者は人種という概念が自明な訳ではないことを指摘する。サルトルが引用したりチャード・ライトの言葉——「合衆国には黒人問題など存在しない。あるのは白人問題だ。」——が示すように、問題は「人種」が考案される背景なのだ。その契機として最大のものは新大陸とそこに住む人々の発見であろう。肌の色や露出が異なる人と出会った時、彼らを自分と同じ存在と思えるか？ヨーロッパ人は、まずは未知の相手を知るために、そして相手の内に自分たちと同じ部分を、いやむしろ差異を、さらには優勢を見出すために「人種」を作り出した。時代が下り、学問の発展がこの概念に科学的裏付けを与えて正当化する。

現在に至るこの概念の存続に目を向けたためにも一読が必要である。

(二七〇頁 税込二〇三四円 5月刊)

こだわってみたいドイツ映画と政治

当たり前の話だが、映画とは唯一無二の娯楽であり、気軽に楽しめるものである。しかしこだわった映画鑑賞は、ときとして重大な事柄に関する態度決定を反映する。今回は、近年のドイツ映画研究を紹介しながら、映画鑑賞の政治性について考えてみたい。

歴史を遠望しつつ、主観を恐れず

ドイツ映画の歴史を大掴みに理解しようとするれば、瀬川裕司『物語としてのドイツ映画史』（明治大学出版会）をまず手に取ることになる。昨年三月に刊行されたばかりの本書は、同国の映画に関するまさに『最新の概説書』である。最初期の上映装置事情からウーファ成立、ニュー・ジャーマン・シネマの展開、東西統一後の傾向に至るまで、整理され切った時事情報には曇り一つない。さらに、登場する人物やジャンルを長いスパンで分析し考察をつむぐ「縦切り」の記述方法にもご注目いただきたい。これにより読者は、移り変わる物語として歴史を認識し、章を追うことに映画史の多重奏を味わうことができる。例えばムルナウの光と影が、ヘルツォークの原風景、そしてベッツォルトの「あるがままの世界」へと変転するようになっている。



同書の成立に、著者である瀬川の膨大な鑑賞体験が不可欠であったことは明白である。彼は半世紀にわたりスクリーン上の「ドイツ」を目に焼きつけ、継続的に現地の上映会場も訪れていたというそれゆえ、監督や作品に対する好き嫌いが感じられる文章もあり、笑いを誘う箇所も。しかしその審美眼が真に冴えわたるのはファシズム政権下の日独映画分析においてである。パターン化された簡書

きとその粗が次々と指摘され、裏側にある政治的な意図が示される。同書には「作品をご覧いただきたい」という著者の言葉が頻出するが、それは彼が、鑑賞の重みを誰よりも知るがゆえなのだろう。

こだわらなき鑑賞者としてのヒトラー

もちろん映画作品と政治との関係は多岐

にわたる。ビル・ニューウン『ヒトラーと映画』（白水社）は、ナチの独裁者とシネマとの関係を、通説に抗いつつ多角的に検証している。第三帝国の映画産業におけるヒトラーの役割を過小評価していた従来の見方に対し、著者は政治的イデオログと怠惰な鑑賞者というヒトラーの知られざる相貌を提起している。また、端々で言及される政権周りの醜聞からは、その徹底した調査の片鱗がうかがえよう。



しかし焦点をあてるべきは、やはりヒトラーの私的な鑑賞態度である。アメリカ文化を嫌悪し、大衆支配に役立つ映画を撮らせるよう仕向けた政治家は、私邸では節操のない映画中毒っぷりを部下たちに晒していたらしい。表向き非難していた表現主義映画やアメリカン・コメディ、ユダヤ人俳優たちの映画も、彼は大量に見ていた。国民社会主義の諸観念は、責任者の映画鑑賞という私的行為を通して、その様々な矛盾をこの上なく露わにしていたのである。

こだわり抜いた眼がフィルム上の政治宣伝を喝破する一方、こだわりのない独裁者は自身の過ちを曝け出す。さて、次号の『綴葉』では映画特集が予定されている。多様に映画を楽しむ今日、映画と書評はいかに結びつくか。本誌のこだわりにご期待あれ。（とよ）

アフリカで、アフリカへ

来る8月の27・28両日、チュニジアの首都チュニスにて、第8回アフリカ開発会議（TICAD8）が開催される。日本国政府やアフリカ連合委員会などが共催し、これまでの7回、幅広い分野からの参加者が社会経済開発について交流を深めてきた。前回会議で採択の「横浜宣言2019」における「3つの柱」の第一は「イノベーション」と民間セクターの関与を通じた経済構造転換の促進及びビジネス環境の改善」であったが、確かに、経済成長の只中にあるアフリカこそ、日本が期待しているそれであるように見える。

発展する、希望の大陸——『アフリカ経済の真実』（ちくま新書）が示すのは、そのような素描とは異なる、厳しい混迷である。鳥の目Ⅱ国際政治経済からの俯瞰と、虫の目Ⅱ足を運んだ各地からの仰望とを駆使して、著者は「開発がもたらす紛争」の逆説を劈開し、介在する構造がもたらす「間接的暴力」を剔抉する。本書が語るのは、あるいは「不都合な」真実かもしれないが、著者は決して煽り立てるわけではない。透徹した議論である、追従でも激昂でもない。それゆえに、その言葉の一つ一つはすしりと重いのである。

「アフリカの農村から発せられる悲痛な声は、圧殺されつづけるしかないのだろうか」——克明に論じられる苦難と、投げかけられる問いかけに、日本——南北問題の此岸——から、同じ時代から応答するとき、『新・現代アフリカ入門』（岩波新書）は有益な指針となるに違いない。本書もまた、鳥の目そして虫の目の、透徹したアフリカ論である。出版から一〇年が経とうとしているが、たとえば、『真実』が論じる、西アフリカ内陸、サヘル地域の不安定化について、「西進する反テロリズム戦争」として早々に着目するなど、

その洞察は現在もなお、（あるいは残念ながら）熟読に資するものである。とはいえ、著者はオプティミズムと同様にペシミズムも退ける。民族語での教育、政治参加の拡大と実質化、それらを通じた自律的経済発展。「脈々と息づいてきた人々の社会変革への営み」に、著者は「人々が変える」アフリカの端緒を見る。そこで強調される一つは知識人の役割である。そのような知識人の思索の一つとして『アフリカ文学講義』（みすず書房）を挙げよう。邦題が強調するとおり、本書は第一には「世界文学」思想に連なる文学論だが、他方、原題の逐語訳「アフリカをめぐる八つの講義」が示すように、著者アラン・マバンク——「北」との不可避的な往還を生きる文人の「現代史や思想、社会問題にも広がる視野をもつ」省察でもある。アフリカを人文学的に「読む」ための良き案内となるだろう。

アフリカでの見聞、アフリカからの言葉。それらに触発されつつ、たとえば今度は自分が一つの「アフリカ」を提示しようとするとき、現地での調査は大いに有用な（あるいはほぼ不可欠の）手段となる。『地域研究へのアプローチ：グローバル・サウスから読み解く世界情勢』（ミネルヴァ書房）は、そのような「地域研究」の方法を説く一冊である。単に現地に赴くだけでは、意義ある知見など何ら期待できない。本書を読み、考えることは、知的生産の技法としてのフィールドワークを会得する第一歩となる。また、表題のとおり、本書は「グローバル・サウス」論でもある。すなわち、「南」からアフリカから、世界を捉えること——「北」の歴史的そして現代的責任を考えること、「南」に現前する変革の可能性を考えること、それらは天を同じうする管鮑の営為に他ならない。（侯爵）

編集後記

京都に来てから5回目の春になった。私は大学を卒業し、大学院に進学した。新しく入った研究室からは、鴨川がよく見える。

今年の桜は、例年になく遅咲きだった。4月になってようやく、鴨川の桜は満開になった。桜を見ていると、フジファブリックのデビュー曲「桜の季節」を思い出す。「桜の季節過ぎたら、遠くの町に行くのかい？桜のように舞い散ってしまうのならばやるせない」卒業と共に京都を去った友は、桜を見ることなく遠くの町にいったのだろうか。そんなことをぼんやりと考えていた。

ある日、この春に就職で京都を離れた先輩から、綴葉の編集委員をやってみないかと声をかけていただいた。昔から本を読むのは好きだったが、文章を書くのは正直苦手だった。でも、春の陽気に包まれるとなんでもできそうな気がして、やってみますとすぐに返事をした。編集会議に顔を出すようになったころには、桜は枝いっぱい葉を茂らせていた。

気がつくと梅雨になっていて、書評も何本か書いた。まだまだ慣れないが、評することは新鮮な読書体験を与えてくれる。私の書評を通じて本を手にとっていただけるとなにより光栄だが、まずは自分自身が楽しんで書評を続けていきたい。

(たいやき)

当てよう！ 図書カード

7月、祇園祭が戻ってくる。といっても、この侯爵、京都は昨年からのので、戻るものにも、祇園祭は初めてなのだが……とまれ、山鉦の一つ「長刀鉦」は生稚児が乗ることで知られている。習わしとして、稚児は相応の官位に叙されるが、それは以下のどれか。

1. 正三位参議
2. 従三位大将
3. 従四位中将
4. 正五位少将

(侯爵)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは8月15日です。



《4月号の解答》 4月号の問題の正解は、3. の岩倉具視幽棲旧宅でした。茅葺屋根の主屋もいいですが、武田吾一設計の対岸文庫もいいですね。図書カードの当選者は、ハードラーさん、とけさん、きらきらぼしさん、大三元さん、すみれさんの5名です。ご当選おめでとうございます。

(きもの)

読者からひびく

○推し出版社特集、知らない出版社ばかりで面白かったです。またやって欲しいです。

(農学部・すみれ)

—— 普段読書をしていても出版社を意識する機会には中々少ないですね。私が好きな出版社は京都の阿吽社。漫画『阿・吽』を通じて知った出版社ですがなかなか面白い本が多いなと感じました。是非読者の方も自身の推し出版社を探してみてください。

○大学生という特集が面白かったです。大学生のうちに、大学生特集の本を読んでみたいのです。

(法科大学院・五穀豊穰)

—— 居るとすぐに忘れてしまいますが、多分「大学生」という時期は人生においてそんなに長くないのだろーと思います。長期休みがあり、平日でも関係なく遊べる友人がいる。そしてそれ故の葛藤がある。学生の内に読むのもいいですが、大学生活が終わった後に改めて読むのもまた一興かもしれません。

○初めて綴葉を手に取りました。本屋に行っただけで知らないジャンルの本を知れて、よかったです。

(農学研究科・麻婆)

—— ありがとうございます。今後も本との小さな出会いをお届けしますね。

(きもの)